



140



イチヨンマル

文風 冴月

Sea of the stars

身体が氷で出来た女の子と、身体が宝石で出来た女の子が、ある時ケンカをする。ケンカに勝ったのは氷の女の子。ツンと澄ました顔で、彼女は冷酷に去っていく。綺麗な真珠の涙を流す宝石の女の子は、深い海の底で今日もしくしくと泣いている。海底に星座を作るとも知らないで。

Twilight to the sky

夕暮れを売る男のところに、永久を語る演説者が訪れる。そこで一番安い黄緑色の風船を買う。風船を手にした演説者は、たちまち身体が宙に浮く。夕暮れ売りは目を細めて見上げるが、途方もない演説は聞こえなくなっていく、橙色の空に溶けるようにして、やがて消えた。

Memory

愛する人の声が聞こえたので押し入れの中を漁ると、そこから出てきたのは古びた人形だった。手に握ったナイフを彼女の面影を残す人形に突き立てると、携帯電話が僕の名を呼ぶ。愛する人は受話器越しに「さよなら」と一言だけ呟いて、ビルの屋上から飛んだ。

機械の森を訪れた三つ目の魔女が、夜空に浮かぶ月を見てぼんやりと呟く。目深にかぶった三角帽の下では疲れ切った顔。隣にやってきた一匹の黒い犬は、絶望の音を立てて爪を噛んでいる。

Journey

僕は霧に埋もれた町のことを思い出している。戦争が通り過ぎた後の世界地図を広げて、毛布の代わりにそれに包まって寝る。瞼の裏側に浮かんでは消える鴉の鳴き声と道化師の涙。朝日が昇ったら、僕は旅に出る。地平線が途切れるところまで行ってみるつもりだ。

Terrarium

硝子製の箱に先輩を入れて保存する。私の大好きな先輩はゆったりと目を閉じて、その長い睫を揺らすことはない。ひどく悲しいのは、永遠を手に入れた先輩に触ることができないこと。手を伸ばしても、私の指は硝子の冷たさにしか届かない。名前を呼んでみても、彼女は眠ったままだ。

Strange tale

行方知れずの王冠が見つかった日に、酒場に訪れた一人の旅人がいた。黒いモノリスの足音に似た声で、夜空の輝きを指折り数えている。街が寝静まった頃、若い墓猫が驚いた眼で旅人を見ているので、私は本物の王冠をそっと彼に被せてやった。

Meeting

怪しまれない格好をした一頭の牛が草原にまでのこのこやってくる。くじ引きの品を手にして満足げに帰っていくのを、私たちは藁でこしらえたカメラで写す。明日には氷売りの喇叭が響くだろうから、それまでには眠らなければならない。

「読み終えたら死ぬ本」があつた。死んでしまうほど面白い本なんだろう、そう言って読んだ男は死んだ。死んでしまうほど怖い本なんでしょ、そう言って燃やしてしまった女がいた。その本にはその人の人生が書いてある。生まれてから死ぬまでの全記録が。読み終えれば、当然……。

Mirage of time

ぼんやりと先が霞み、未来が見えた。時間の蜃気楼。どこまで行ってもやって来ないその未来は、僕らの夢であり希望である。オアシスを求めて砂漠を彷徨うみたいに、明日を求めて日の出を待つ。今は辿りつけなくても、あすこに見える未来に向かって一歩踏み出す。

透明だった世界に舞い降りた三原色が、言葉にならない声で言うには「真っ暗です。何も見えません」と混じり合った感想。イチジクの中身をくり抜いて虹を再現した贅辞で余剰の誤字を四六時中眠りこけている。

Wrist battle

左手首と右手首、それぞれに一本ずつ傷をつけていく。数が増えるほどに、深く、深く。最初に音を上げた方の負け。これはそんな戯れ。今日はいったいどっちが勝つのかな。

雲ひとつない青空に人差し指の爪の先で傷をつける。私はその度に、涙を流す空に申し訳なくなって、真っ黒な日傘でその傷口を塞いでやる。

Pray

誰かの幸せを願うことは罪にならない。誰かの成功を祈ることは罪にならない。けれど、誰かの幸せの裏には誰かの不幸があること、誰かの成功の裏には誰かの挫折があることを忘れてしまうのは、罪になる。

My job

仕事に行きたくなかったので、名も知らぬ駅で降りる。蟬時雨に埋もれた無人駅で私はひとり立ち竦む。懐かしい潮風の匂いに誘われて、陽炎の中を歩く。案山子が警備する砂浜には、貝殻で出来た切符が落ちている。会社行きの切符を見つけたが、私はゆつたりと海の中へ進むことにした。

Rain

《雨》と呼ばれる人達が私の泊まる村にやってくる。水滴が地面を叩くような足音を立てて。村人達は家の中で《雨》が通りすぎるのを待つ。足音が止み、外に出てみると、戸の前にはたっぷりの水が置かれている。飲み水を得る貴重な機会だ。村人の顔には虹がかかる。空に雲はなかった。

夢に出てきた君を 胸に抱いて眠る 夢に出てきてくださいと祈りながら

Hatred

好きになっちゃいけない人ばかり好きになる。嫌いになっちゃいけない人ばかり嫌いになる。嫌いになっちゃいけない自分を嫌いになって、好きになっちゃいけないあなたに、恋している。

Under the rose

溢れ出した悲しみの流体が、薔薇の下で見つめ合う僕らの隙間を埋める。不可逆的なふたりだけの世界を前にして、不自然なほど僕は笑ったんだ。君もつられて笑うかなって。そう、願った。

Over my umbrella

周りの人が傘を畳んでいるのを見て、雨がやんでいたことに気がつく。悲しみが当たり前のように、呼吸をしていくみたいに、残酷なまでにずっとずっと続いていくと思っていたけれど。自分が気がつかないだけで、雨はやんでいるってこともあるんだ。雲の切れ間から束の間の青が見えた。

Extinction

窓から飛び降りる夢を見る。風を切り、地面に近づく程、私の身体は退化していく。両生類、爬虫類、魚類……進化を遡り……果ては一つの細胞になって、細胞膜の内側から迫りくる大地を眺める。そうして、一滴の雨となって降り注ぐのだ。打ちつけられて、弾けて消える、私の夢。

Desert

貝殻で出来た時計が砂に埋もれていく。アンモナイトのため息が砂漠の夕暮れを告げる。時折なびくヤシの木の葉が、水平線の舐先を曲げようと奮闘する。

鳥が落ちていく。羽をしっかりと畳んで、空気の茂みを掻き分けて、大地に突き刺さろうと幾羽もの鳥が落ちていく。重力にもがれた翼で、ひどく諦念を抱いた嘴で、河や森に還っていく。今まさに、雲を割って鋼の翼が落ちていく。全ての鳥が墜ちていく。

A night scoop

夜、カメラを持った男がやってくる。心霊写真を撮りたいんです、と男は言った。数枚の写真を撮ると男は去っていく。次の夜も男は現れる。望む写真が撮れない男は毎夜やってきた。まったく撮れないから諦めるよ、と男は言った。記念に僕と写真を撮ると男は去って行った。もう明日は来ないだろう。